

銀糸の雨

能村 研三

コロナ禍の新語

七月のはじめに中央例会を再開したものの、新型コロナウイルスの感染者が再び増加傾向となり、一向に収まる気配がないため、八月の中央例会は会場での開催を断念し紙上句会に切り替えることにした。

コロナ禍の状況となつて早くも半年の月日が経つてしまうことになるが、この短い期間の中で世の中の状況が目まぐるしく変化していることに驚愕の念を禁じ得ない。

次々と新しい言葉が世の中で使われるようになり、コロナ禍の新語が俳句にも詠まれるようになってきた。それも物珍しく時事俳句的に詠まれるのでなく、もはや生活の一部の言葉として使われているようにも思える。

コロナ禍での新語を例にあげると、三密、オーバーシュート、ロックダウン、感染爆発、ソーシャルディスタンス、ステイホーム、リモー

ト、不要不急、濃厚接触、夜の街、アベノマスクなどなど。この他にもたくさんあるようだが、それだけ関心のある言葉として短期間に人々の間に浸透してきたのだろう。

ただ「新しい日常」という言葉とその使い方にはいささかの疑問を感じる。これは、コロナ禍による我慢の生活が、そう簡単に解消するものでなく、長丁場でコロナと付き合つていかななくてはいけない警告の言葉に聞こえてくる。コロナ以前のような人々の自由な行き来が、当分の間は出来ないことを意味する。

一日も早いワクチン開発が望まれるところだが、高齢化が進む中、半年、一年という貴重な期間が有効に使われないことには少し苛立ちを感じる。

早く「いつもの日常」が戻つて来ることを望むものである。

青田満々銀糸の雨を受くるかな
非通知の着信を聞くハンモック
一本の荒草を抜く真顔かな
巻き締まりよき甘藍の重さかな
菅貫の縄の切口鋭かりけり
照り降りの空明るくて昼寢覚
擦り落ちる雨滴の愉悦青すすき
白桃を啜る真顔は何惟ふ
着岸の波の被さる箱眼鏡
土用芽のくれなゐを見て身養生

能村 研三